〔論文〕

保田與重郎とその古典批評 ——表象としての女性をめぐって

坂元昌樹

YASUDA Yojyuro and his criticisms on Japanese literary classics : Representations of Japanese women in classics

Masaki Sakamoto

要旨

In YASUDA yojyuro's literary criticisms on Japanese literary classics, there were close relations between his discourses on ethnicity of Japan and those on ancient Japanese women. From early stages of his activities as a critic, YASUDA repeatedly utilized those representations of Japanese women to symbolize some antithesis to the ideas of modern times and modern rational world. Methods of utilizing those representations of women to reinforce Japanese cultural tradition was one of main strategies of Japanese Romantic School led by YASUDA from 1930's to 1940's.

キーワード

保田與重郎・日本浪漫派・古典評論・女性の表象・日本の文化伝統・和泉式部・〈母〉の表象

はじめに

昭和期の日本において「日本浪曼派」の運動を唱道した文芸批評家である保田與重郎（一九一〇・四・一五―一九八一・一〇・四）の一九三〇年代から一九四〇年代にかけての批評営為には、一つの顕著な特徴が看取される。それは、この時期の保田の批評テキストにおいては、〈民族〉の〈文化〉的〈伝統〉の構築に関する諸言説と、〈女性〉あるいは〈女性〉性をめぐる言説との間に、密接な連関が存在することである。保田は、その一九三〇年代の初期評論から日本の〈女性〉の問題に関して反復して言及すると同時に、その一連の古典評論においては、〈女性〉に関する言説を選択的に動員しつつ、〈民族〉をめぐっての〈文化〉的〈伝統〉の表象の構築を試みている。すなわち、保田の批評においては、ネーション（nation）とジェンダー（gender）という二つの変数の間に看過できない関係性が見出されると言える。

周知の通り、一九九〇年代以降の女性史研究は、近代の歴史的産物としての国民国家（nation state）が、その国民化の進行のプロセスにおいて、国家的な諸制度や思想言説、また運動実践や生活風俗といった複数の水準を通して、ジェンダーという変数と深く関与してきた歴史的経緯を検証してきた。そしてそのような知的コンテクストは、既に日本の近現代文学研究においても基本的な分析の前提である。「日本浪曼派」の運動を構想した批評家としての保田の批評活動に関しても、ネーションとジェンダーという二つの変数の交錯という観点からの再検討が重要なものとなっていることは再言を要しまい。既に保田の批評に関してジェンダーの視点を導入した先行論は散発的な形で存在しているが、保田における〈文化〉的〈伝統〉に関する思考と〈女性〉に関する諸言説の関係性に関しては、その統一的な分析はまだ不十分なままに留まっており、未検討のままに残された論点が少なくないと論者は考える。(注一)

保田の古典評論の中で、〈文化〉的〈伝統〉の理念と〈女性〉の表象の両者の通路を最も象徴的に示すテキストが、

一九四二年四月に育英書院から刊行された評論集『和泉式部私抄』に収録された平安朝歌人の和泉式部に関する一連の評論である。これらの評論は一九三七年初頭において当時の雑誌に発表された保田の和泉式部に関する複数の文章をその原型としているが、この『和泉式部私抄』が興味深いのは、同時代の日本の時局の推移に従って、内容上の変更が生じ、また著者自身がその変更の意味を改めて意味付けている点にある。以下の本論においては、この『和泉式部私抄』を含む一連の批評テキストを取り上げながら、保田の古典批評における〈女性〉の表象の問題に関して検討する。保田の言説構造において表象としての〈女性〉がいかに構成されているかという問題の考察は、いわゆる「日本浪曼派」運動をめぐる問題機制の全体を検討する際においても、有効な示唆を与える筈である。

一

一九三〇年代後半から一九四〇年代にかけての保田の批評的テキストにおいては、一連の〈女性文化〉論とでも呼ぶべき考察が多く散見される。保田は、その批評活動の比較的早い時期から、同時代日本の文化の考察の一環として、同時代の女性とその性格をめぐる問題系に対して積極的な言及を行っている。

例えば、雑誌『新日本』一九三八年三月号に掲載された「日本の女性」と題する小文において、保田は同時代の女性歌人への批判を行う一方で、〈和泉式部〉や〈建礼門院右京太夫〉といった王朝期の人物を肯定的な女性像として評価する。保田は古典期の〈女性文化〉をめぐって次のように論じる。(注二)

〈和泉式部と近代文芸、といふやうなことを僕はまへに考へたが、一般に小野小町――もつと古い家持の女性サロンから始まる王朝中期後宮の女性文化、それは後鳥羽院の美しい才ある侍女たちや建礼門院右京太夫とか式子内親王やうたゝねやさらしなの作者までで終るものだが、この時代の女性教育は、代々の詩人や芸術家が再びし

得ない文化と僕には思へるのである。（中略）王朝の歌を作つた女達より今の世の歌をつくる女性は一般に少しも進歩発展してゐない。もし和泉式部よりえらい女が出、建礼門院より可憐な少女詩人が何人も出たら、私は進歩をそのとき信用する。一般に女性は進歩主義者である。ところで王朝の女性はさうでなかつた。〉

このテキスト中の保田による同時代女性に対する考察においては、当時の男性知識人の多くに共有されていたと思われる通俗的なステレオタイプに満ちたセクシズムの言説が顕著に現れている。それ以上に特徴を示すのは、それらのテキストにおいて、保田の女性歌人に関する批評が〈進歩〉的思考に対する批判のために援用されており、日本の王朝期の〈女性文化〉が〈近代〉批判の一環として動員されている点である。この「日本の女性」より早く発表された「童女征欧の賦」（『コギト』一九三六・三）と題する同時代女性論と文学論が一体となったエッセイにおいても、同時代女性文化をめぐるイメージが次々に提出されつつ、例えば同時代の〈女流文芸家の貧窮日記〉を〈僕はその現物の方に涙ぐましくなる〉と批判する一方で、源氏物語の桐壺巻に関して〈王朝の女性教育の一つの現れ、自然にさながらに語られている文章が、形定つて生き残つた〉ものであるとして紫式部を評価する。[注三] このように〈近代〉的な女性文化が〈伝統〉的な〈女性文化〉と否定的に対比されるという構造が反復的に示されていく。[注四]

〈女性文化〉に関する考察を〈近代〉批判の観点から展開する保田の批評の方法をより明確に示しているテキストが、雑誌『新日本』に一九三九年二月号から三月号にかけて連載された「川原操子」と題する評論である。周知の通り、『新日本』は一九三七年七月に設立された「新日本文化の会」の発行にかかる雑誌であり、国策的文化運動が活発化したこの時期の文壇状況を反映する雑誌の一つである。保田はこの「新日本文化の会」のメンバーであり、この評論は「『日本の自覚』先覚者研究」という『新日本』による共通テーマの下で発表されたものである。この「川原操子」と題する評論において、保田は日露戦争期において内蒙古のカラチン王府に教師として入り日本側の情報収集活動に協力したことで著名な川原操子の人物像について、日本の〈先覚者〉として定位しつつ以下のように評価して

いる。〔注五〕

〈私がここに、明治先覚者の一人として殊さら女性の中より選びだして女史を語ることは、女史のもってゐた行為への勇気と決意の実践が、つねにわが日本の女性の美しい心ばえの伴奏であつたといふ事実を知ったからである。その愛情が、そのままにヒュマニズムとして、また国家の理想と合致してゐたのである。己の思いをかくして行動した女丈夫でなく、己の思いに自然に泣き悲しみ、しかもそのままに崇高な心情で行為した女性であつた。その文章にも、やさしい日本の女性の心が、どんな行為に付随した身振りも宣伝も伴わずに自然に描かれてゐる。〉

〈女史の愛情は、日本の女性の天性の美徳に他ならないあのしとやかなやさしさであつた。女史の折にふれて告白したのも、最後には一切の命目と議論が空白となつたときになほ残る日本の女性の血の記憶であつたと思われる。〉

保田は川原操子に対する評価を、〈日本の女性の天性の美徳〉あるいは〈日本の女性の血の記憶〉といった観点から構成する。ここでは川原操子を日露戦争下の危険な情報収集活動に挺身した勇気ある近代的な〈女丈夫〉として捉える同時代の一般的な評価が否定される。その代わりに保田は、川原操子を一種の近代的な主体性を持った女性としてではなく、〈その女性の偉大な事業は、古来のまゝの女らしい愛情が、そのまゝ新しい日の祖国に結びついた一例〉であるとする評価が示すように、王朝期の日本女性に通じるような類型的な日本女性として措定するのである。それは、〈この女性が一人の日本女性の典型であり、それはやさしい日本女性の一表象であったといふ側のみがはっきりと人々の脳底に印象されるのである。この女性に集った、又現れた日本女性の俤を描くために、小生はさういふ代表のやうな女史を選び出すのである。〉といった続くテキスト中の評価に明白に現れる。〔注六〕この評論中では、川原操子の行動が日本の〈古来〉の〈女性文化〉と接続されることで、同評論中でそれらを否定したと位置づけられる明治期以

降の日本の社会文化状態が批判されており、同時代の〈女性文化〉論を近代日本の批判へと結び付けていく保田の思考の一端が顕在化する。

ところで、一九三〇年代後半の一連の〈女性文化〉論と並行する時期において、保田は近代の男女をめぐる制度批判とでも呼称するべき複数のテキストを発表しており、それらは一連の〈女性文化〉論とも一面では連関している。先の「川原操子」発表と同年の一九三九年に刊行された保田の代表的な評論集に『ヱルテルは何故死んだか』（一九三九・一〇　ぐろりあ・そさえて）があるが、これは単なるゲーテの小説論としてのみならず、保田による近代の男女間の制度論として読むことができる。[注七] この評論集では、〈近代式結婚〉や同時代日本の〈愛情〉の制度に対する保田による批評が集中的に展開される。そこでの保田の思考は、独創というよりもその議論の源泉としてのバッハオーフェンやエンゲルス、さらにニーチェの考察に負う部分が大きいが、それら保田の主張がそれらを踏まえた近代の社会文化批判として展開されていることをここでは確認しておく。[注八] 一連の保田の近代批判の思考は、その古典文学を素材とした評論においてより明瞭な形で現れることになるが、これに関して次節で検討する。

二

保田による古典文学に関する批評の中で古典女性の表象を中心に論じた評論は、「更級日記」（一九三五・八『國語國文』）を初めとして早くから散見される。この保田の評論「更級日記」は、堀辰雄の平安期女性日記への関心を媒介し、その後の堀の「かげろふの日記」（一九三七・一二『改造』）等の構想へ至る一契機となった可能性があることでも知られる。[注九] そのような同時代文壇へも一定の影響を持った保田の古典評論中で、古典女性の表象と日本の〈民族〉の〈文化〉的〈伝統〉の関係性をめぐる保田の論理が最も顕在化した象徴的なテキストが、和泉式部に関する一連の評論である。保田による和泉式部に関する批評は、一九三七年一月から二月にかけて雑誌『コギト』に掲載された

「和泉式部家集私鈔」と、ほぼ同時期に雑誌『文學界』の一九三七年二月号に掲載された「和泉式部」の両者に代表される。これらの和泉式部に関するテキストは、後の評論集『和泉式部私抄』（一九四二・四　育英書院）に改稿収録されることになる。[注一〇] この単行本『和泉式部私抄』所収の「はしがき」において、保田は、以下のように自身の和泉式部評価の方向性を論じている。[注一一]

〈私が和泉式部を論じたのは、彼女の文芸と詩人を以て、将来の日本の、民族文化による偉大な世界構想の源泉自覚の一助たらしめようとしたのである。我国が汎世界に対して新しい秩序をたて、国の文明を世界の規模で行ふ自信の根底となるものは、かかる歴史中期の可憐の女性にさへ形成されてゐるといふことを、当時もくりかへし口にしたのである。我々の民族が和泉式部の如き詩人をもつことは、我々のもつ独自な文化的優秀性の確証であり我々が将来文化上の世界政策を自国の理想と精神に依て堂々と行為しうるとの、思想の自信となり源泉となるのである。〉

保田は、和泉式部という〈歴史中期の可憐の女性〉の〈文芸と詩人〉の理解こそが、〈将来の日本の、民族文化による偉大な世界構想の源泉自覚〉のために有効であり、また日本の〈独自な文化的優秀性の確証〉となり得ると言明する。同様の主張はこの評論集において、〈近代の終焉の後に始まる日本文化の構想については、我々は無数の関心をもってゐる。しかしこの日に、和泉式部の如き文芸を示しうることに、私は確信の根底をもつ。（中略）国の同胞が文化上の自覚と自信をつよくし、四海の異民族が仰望する如き文化を与えるといふことは、こと二つのみちなる如くして、創造の原理としての大本は一つである。わが正しく美しい文化を、やさしくおごそかに示すといふ方法以外に、今日の文化建設の任務の根本原理はないのである。〉といった形式において反復されていく。[注一二] 保田は、和泉式部の再評価を通して、世界に示しうる〈日本文化〉の〈自覚と自信〉が形成可能となると唱える。

ここで注意する必要があるのは、このような保田の和泉式部評価は、一九三七年の「和泉式部家集私鈔」「和泉式部」の雑誌初出段階においてはまだ十分に成立しておらず、改稿過程を経て一九四二年の『和泉式部私抄』の単行本の段階において確立したものであることである。初出の「和泉式部家集私鈔」「和泉式部」と『和泉式部私抄』収録の文章の間には、少なくない内容上の異同が存在する。例えば、一九三七年の『文學界』掲載の「和泉式部」における保田の和泉式部評価の基本的な方向性は、〈歴史以来第一等の恋愛歌人だつた王朝の女性和泉式部の詩歌はつねに「哀歌」〉であるといった論評に象徴されるように和泉式部の歌を〈孤独と哀愁をうたつた女性の歌〉と見なす評価の視点に留まっており、一九四二年段階での日本の〈民族文化〉を〈世界〉に対して示す存在としての評価は形成されていない。『和泉式部私抄』の本論の記述も「はしがき」での主張に対応した形で随所にわたって改稿されているが、そこには五年間の時間的な間隔から生じた思考の変化だけでなく、言うまでもなく一九四一年一二月の太平洋戦争の開始を含む国内外の状況の激変が介在しているわけであり、それらが保田の和泉式部評価の大幅な改変を招来したと言えるだろう。

しかし、日本の古典女性の表象を論じるに際して、その女性表現の〈伝統〉の内部において、保田はなぜ和泉式部に注目し特権化するのか。例えば同じ王朝期を代表する女性表現者としての紫式部あるいは清少納言といった人物ではなく、保田はなぜ和泉式部をその高い評価の対象とするのだろうか。

この保田の評価の背景を検証するためには、補助線として一九三〇年代前後の日本における和泉式部をめぐる国文学研究の評価の動向を概観しておく必要がある。保田は、初出「和泉式部家集私鈔」の「附記」において、以下のように述べながら、同時代の和泉式部に関する国文学研究の状況を批評する。

〈私は国文学の専攻者でない、しかし私は国文学や古美術を年少の日から愛惜した。（中略）和泉式部年齢考証を疏そかにしたなどの非難は肯んじない。何となれば私はさういふ意味での仕事、日本の国文学者の唯一の仕事

を軽蔑しないが、自分には出来ない。（中略）なほ年齢考はすべて、与謝野晶子女史の説を漠然と信じた。その上式部の年齢を考証した学者は何人あるか知らないが、近代の国文学者の百倍位与謝野女史を私は尊敬してゐるからである。私は今日の国文学の専門研究者でない、真淵宣長の亜流でない、専ら精神の継承者でありたい。〉

与謝野晶子の和泉式部論への共感を隠さない保田は、一連の和泉式部論において、同時代の国文学による和泉式部研究の動向を常に意識し、それへの反措定として自己の論を構築していく。例えば、保田は、〈式部の日記を文学価値希薄と断じたのは「平安朝文学史」である〉（「和泉式部論」）といった言及を通して、国文学者である藤岡作太郎の著名な『国文学全史　平安朝篇』（一九二三・一　岩波書店）における「和泉式部日記」に関する評価の〈文学上さまで価値あるものにあらず、式部に見るべきは、もとよりその和歌にあり〉に触れ、その見解を批判的に捉えた上で反駁する。また、同時代の〈国文学者〉による和泉式部評価を批判して、〈今日の国文学者が、「愛欲の奴隷」などいふ露骨な自然主義語彙で式部を批評してゐることが私にはなさけなく思はれた〉とし、〈我々の時代において一つの系譜としようとした王朝文化の中の式部は、凡そそのやうな野蛮露骨な言葉と思想を抹殺する側の立場のものであつた〉（「和泉式部論」）として反論する。ここでの〈「愛欲の奴隷」などいふ露骨な自然主義語彙〉への批判は、例えば、保田の「和泉式部家集私鈔」「和泉式部」論と同年に刊行された小室由三・田中栄三郎による『和泉式部日記詳解』（一九三七・七　白帝社）における評価を想起させる。小室らは〈逡巡しつゝもひたむきな情炎の囚となつてゆく主人公の娼婦的傾向は、透徹した観照に浸る紫式部日記や縹渺とした幻影を描く更級日記に比して、殊に凄惨な苦悩に喘ぐ蜻蛉日記の母婦的傾向とは興味深い対照をなしている。〉としている。保田の批判は、このような〈情炎の囚となつてゆく主人公の娼婦的傾向〉といった類型的評価に対する明確な反措定として読めるだろう。このような同時代の国文学研究への批評意識は、保田の『和泉式部私抄』の全篇を通して示されている。

ここで一九三〇年代前後の国文学研究における歌人和泉式部に関する総体的な評価の傾向を確認する。国文学研究

の領域における和泉式部をめぐる表象形成の位相を把握する意味で、同時代の和泉式部に関する評価像を概観したい。例えば、国文学者の西下経一は以下のように論じている（『岩波講座日本文学　平安朝の日記紀行』一九三二・一岩波書店）。

〈此の日記の特色は貫くやうな精神が乏しく、消極的な気分に止つてゐる事である。これは作者の性格が弱くて、やむを得ないやうな気持に陶酔して了ふ為めであらう。〉〈作者は感情の奥にどうにもならないあきらめをもつてゐて、時の感情に溺れてゐるやうにも見える。〉

西下は、「和泉式部日記」中に現れた一種の惑溺ぶりを〈作者の性格〉の問題に帰属させる形で否定的に評価する。また、同じく国文学者岡一男は、〈その心理描写は分析的でなく、抒情的である。さうして、作者は自己を三人称に書きながら、いつしか客観的態度を忘れ、主観的表白をしてゐる、これは「日記」の小説的手法の欠陥と言へる〉と論難する（「和泉式部日記の研究」『日本文学講座　5随筆日記篇』一九三四・一一　改造社）。岡もまた、「和泉式部日記」中の〈作者〉における〈分析〉性や〈客観〉性の欠如するあり方を一種の〈欠陥〉と捉え、〈作者〉の属性の問題として批評している。ここでの西下や岡の見解は、当時の「和泉式部日記」を通じての和泉式部の像に関する最大公約数的な評価といってよいだろう。このような同時代の評価軸に対して、保田はそれらとは対照的な評価の観点を導入することになるが、その背景について次節で論じる。

三

一九三〇年代の国文学研究による和泉式部をめぐる評価の定式化に対して、保田が肯定的に注目するのは、まさに

「和泉式部日記」の持つ〈分析〉的知性から離脱したかのような表現性であり、そこから構想される和泉式部自身の反〈分析〉的で叙情的な表象である。保田は、同時代の和泉式部に関する否定的評価を反転させて、その否定的な側面をそのまま肯定的な属性として評価軸を組み換えようとする。

例えば、保田は『和泉式部私抄』の一節において、「和泉式部集」第三の著名な歌「おほかたのあはれをしるにおつれども涙は君にかけてこそおもへ」の歌に関して、〈このかけてと云ふことば〉が〈複雑な使ひ方〉であるとした上で、〈和泉式部の歌にはかういふ状態をあらはに示して歌はれたものが多いが、むかしから国風の学問ではそれを難じなかつたばかりか、むしろ弁護してゐる。わが古典の歌が、多くさういふ愛情の極致の状態で生れたからである。〉とする。[注一三] 同様の語彙を用いた記述が少なくないが、ここで保田は、〈和泉式部の歌〉に示されるような〈かういふ状態〉＝〈分析〉的な知性や〈客観〉的な理性からは懸隔した特定の感情への没入状態の中に、近代的な知性が指し示すものとは対照的な没我的な心性を見出している。これは一見したところ同時代の国文学研究における和泉式部評価と同様の評価軸に立脚しているようであるが、保田においては〈和泉式部の歌〉に看取されるこの状態は没知性的で非合理的な状態として否定されるべきものではなく、むしろそれ自体が近代的な知性や理性に対する代替的価値を持つものとして肯定的に提示されているのである。

『和泉式部私抄』において保田は、和泉式部に象徴される王朝期の女性歌人が、〈人間的解放とか恋愛至上主義といつた弁解と束縛のものの考へ方で恋愛を思ひ歌つたのでない。たゞの自然の生き方から、恋の歌を歌つたのである。こゝに歌として示されたわが国の古のみちの尊くおごそかな本体がある。〉として、その〈たゞの自然の生き方〉という理念を強調する。保田の評価する〈和泉式部〉という女性の表象は、そのような〈自然〉や〈わが国の古のみち〉へと直接的に連続するものとして、近代の進歩的・合理的な世界観への反措定という側面において、集中的に構築されていく。[注一四] 保田が和泉式部という存在を〈将来の日本の、民族文化による偉大な世界構想の源泉自覚〉に貢献するものとして高く評価した背景は、和泉式部の表現における〈分析〉性や〈客観〉性の欠如として否定的に評価される先

の没我的側面こそが、逆にそのような論理に支えられて構築された近代世界のあり方に対する先鋭な反措定を構成するからである。和泉式部と比較した際に同時代評価においては一般に相対的に知的であり分析的であると評価される傾向のある紫式部や清少納言に対して、保田が和泉式部に注目する理由の一端でもあろう。

ここまで確認してきた通り、一連の和泉式部論において、表現者としての和泉式部像は、保田によって近代の合理性への反措定を象徴する表象として構築される。そして、この和泉式部という女性の表象を選択的に動員することで、日本の〈民族文化の偉大な血統〉をより強化しようと試みる保田の戦略は、評論集『和泉式部私抄』の各部分に顕在化している。保田は和泉式部の位置を次のように論じる。(注一五)

〈彼女の文学の意味はそれをイデオロギーで生きたのでなく、愛情の自然の真実で生きた。この生き方をもつと偉大な精神と運命で了解されたものが、後鳥羽院の詩と美学である。この意味で後鳥羽院の都の文芸と島の風雅の関係は、わが文学の古典時代とその後の時代の二つをかねて、歴史的にはその中間の最高峰であつた。和泉式部が、国の文化の最も偉大なことを考へた精神に回想され、又国の文学を最も深く思ふ者に回想された理由は、この文学の精神の歴史上の立場からである。同時に彼女が人間の文芸として、ある切ない説話に描かれ、ある種の信仰の対象となつた理由も、さういふ心の歴史を表現した点にあつた。〉

ここで、保田の女性歌人としての和泉式部の評価は、和泉式部よりも〈もつと偉大な精神と運命〉において生きた〈後鳥羽院の詩と美学〉によって包摂され、その価値を規定されることになることに注意したい。周知の通り、保田の日本の〈文学史〉に関する構想として、いわゆる〈後鳥羽院以後隠遁詩人〉論がある。この〈後鳥羽院以後隠遁詩人〉という保田の〈文学史〉構想は、その評論集『後鳥羽院』（一九三九・一〇　思潮社）において集中的に展開されている。保田は後鳥羽院を日本文学の歴史における結節点として評価した上で、先行する〈西行〉と後世の〈芭蕉〉

を共に〈隠遁詩人〉という観点から系統化し、この三者を主軸とする〈隠遁詩人の系譜〉を樹立する。保田によれば、後鳥羽院は〈綜合者であると共に正風の止揚者〉であり、〈自らにして英風をもつた指導者〉として評価が可能な存在なのである。(注一六)

〈もののあはれを中心にして考察される日本文芸の歴史を思ふとき、そのときこそ院が一つの時代の集約者としてあらはれ、それは従つて次にくるものの萌芽である。正しく近世の萌芽であつた。芭蕉が彼の変革の決意に方法を与へたとき、後鳥羽院を回顧したことは、このときに意味深く、しかもそれとこれとは別のことを意味するのである。院が古代の復興者として、決意の行為者として、伝統の醇美の防衛者として、またやがて来るものの源流としての意味は、釈阿西行をへて、この御一人者の形相の中に見られたのである。〉

この保田の〈文学史〉構想に関しては、従来から折口信夫の「女房文学から隠者文学へ」(『隠岐本新古今和歌集』「巻首」一九二七・九)の影響が知られているが、保田はこのような基本的認識に立脚しながら、自らの構想する〈日本文芸の伝統〉の内部に、旧来の〈日本文学〉の諸事象を回収し、その〈文学史〉的位相を再構成していく。和泉式部評価もまた、この後鳥羽院を中心とした評価軸に従属して回収されることになる。一連の和泉式部の表象が後鳥羽院に従属した形で最終的に価値を認定され、保田の〈後鳥羽院以後隠遁詩人〉論の強化において動員されることは、その評価上の一問題を内包している。

先に引用した『和泉式部私抄』の「はしがき」において、保田は〈私は民族文化の偉大な血統を明らかにするために、その一人として、この和泉式部のことを以前にも述べたのであるが、私の民族文芸の思想に反対するだけを使命としてきたやうな当時の我国の文壇に於ては、これを日本主義文芸運動の一つの積極的な表現と解して、あるひはこれを「フアツシヨ」と呼び、その当時の都下の新聞雑誌の匿名批評は、一切に和泉式部をも否定しようとしたが、雑

誌『改造』の六号子の如きは、自分らには和泉式部よりハイネが面白いのだと云つた。〉と記している。保田がここで言及している〈雑誌『改造』の六号子〉の批評とは、『改造』（一九三七・四）に「文壇寸評」の名で掲載された保田批判を指しているが、保田の一連の和泉式部論においては、和泉式部は近代的な理性や知性に対する代替的価値を担う表象であったことは既に触れた。保田における和泉式部は、ある意味で旧左翼陣営の文学者にとってのハイネが持つ以上に、同時代の日本国内の文化状況に対する表象として意識的に導入されていたと考えることができよう。

四

保田の古典文学評論における女性に関わる表象を検討する際に興味深いのは、その「母」に関する思考の位置である。言うまでもなく「母」や「母性」をめぐる表象の展開は、日本の近代以降の文化的言説の動向において、きわめて多岐に及ぶ問題を含むものであるだろう。一九三〇年代から一九四〇年代にかけての保田の母をめぐる言説もまた、同時代の社会文化の動向とも密接に関連を持つような特徴的な傾向を示している。[注一七] 保田の批評テキストにおける母の表象の浮上は、早く「日本の橋」（『文學界』一九三六・一〇）の末尾に登場する名古屋の熱田裁断橋の碑銘に関する堀尾金助の母親をめぐる著名なエピソードの紹介に遡るものである。[注一八]

〈私はこの銘文を橋に雕み、和文で描いた女性のいさゝかも巧もうとしなかつた叡智の発生を思ふとき、今も感動に耐へない。難しい理屈を語る必要がないといふより、それはむしろ愚かしい限りであつた。かなしみの余りこの橋を架けた女性は、心情によつて橋の象徴と日本の架橋者の悲しみの地盤を誰より深く微妙に知つてゐた。わが誇りをゆきて同胞に伝へよといふのではない、光栄を語りつげよと説くのでもない。この勇しい若武者の母はあはれにも美しく、念仏申し給へやとかいたのである。〉

周知の通り、「日本の橋」は保田の初期の代表的評論であり、その結末部分に位置するのがこの堀尾金助の母親に関する有名な挿話である。ここで保田は戦死した子の死を悲しんで橋を架け和文で銘文を記した堀尾金助の母親の〈いさゝかも巧もうとしなかつた叡智〉を肯定し、〈かなしみの余りこの橋を架けた女性〉の持つ〈心情〉を、〈日本の橋〉の持つ情感の象徴として評価する。保田は金助の母の〈難しい理屈〉とは無縁な〈愚かしい限り〉の行動を全面的に肯定し、その〈あはれ〉な〈美し〉さを賛美した上で、「日本の橋」の結末を次のような一文で閉じる。〈たゞその永劫に美しい感傷、一切人文精神の地盤たる如きかゝる感傷にふれるとき、今宵も私は理智を極度にまで利用してみつゝ、なほつひに敗れて愚かな感動の涙にさへぬれ、この一時の瞬間をむしろ尊んでは、かゝる今宵の有難さと、むかし蕪村が稀有の機縁を嘆じて歌つた詩にかりて思つてみる。それこそ最後の理智と安んじたい我らのなさけない表情であらうか。〉「日本の橋」の結論部分での母の表象は、〈理屈〉や〈理智〉と対極的な位置に立つものとして象徴化されており、この母の像こそが、〈私〉の〈理智〉を〈つひに敗れ〉させ〈愚かな感動の涙にさへぬれ〉させる主体となる。後に残るのは〈最後の理智と安んじたい我らのなさけない表情〉のみであり、この保田の初期の代表的評論における母の表象は、いわば分析的な理性と知性を消滅させる媒介的存在として機能している。

このような理性や知性に対峙するものとしての母の表象の位置は、「日本の橋」を含めた保田の批評テキストにおいて無視できない位置を占めている。この母の表象は、先に検討した保田による和泉式部の像に示されるような理性の廃棄された主情的な状態のあり方とも、その構造において密接な関連をもつだろう。いわば、母の像もまた、近代的な知性や理性に対峙するものとして象徴化される側面を持つ。

早く「日本の橋」に現れた母の表象は、保田の批評にその後も反復して登場することになる。特に一九四〇年代以降、戦時下の保田は、母の問題を、日本の〈文学史〉の問題の一環として再検討しなければならないと一連の評論で主張する。[注一九] 例えば、「母の文学」（『婦人公論』一九四二・五）と題するテキスト中で、幕末期に桜田門外で井伊直弼を暗殺後自害した薩摩浪士の有村雄助・治左衛門兄弟の母として知られる有村蓮寿尼に関して、その〈雄々しくも君

に仕ふるもののふの母てふものはあはれなりけり〉の一首を引きながら、〈文学の問題としてここで私のいいたいことは、今日までの近代文学では、かういふ形で「母てふものはあはれなりけり」といふ世界を扱ったことがなかったといふことである。〉と論じ、〈私は、母親の教訓的な物語、人口問題的母性擁護をいっているのではない。母と女といふ概念が近代に於いては異なったといふことを土台にして、その時の母とは何かといふことをいうなら、この思想としての母とは歴史であり、民族であり、伝統である。〉として、〈思想としての母〉の重要性を指摘する。

ここまで検討してきた通り、保田は近代の分析的な知性や理性の対極にあるものを、その古典批評を通して、和泉式部に象徴される王朝期女性や母の像の中に見出していく。そして王朝期女性や母の像に見出されたそのような属性が、同時代日本の〈文化〉的〈伝統〉の定義の為に利用されることになる。保田はそのような一連の女性の表象の操作を通しての新たな〈文化〉的〈伝統〉の創造＝想像によって、日本の〈民族〉概念の再構築を試みているといってよい。保田が日本の〈民族文化の偉大な血統〉をより強化するために、古典批評を通して女性を含む多様な表象を動員した戦略の背景には、近代世界の内部において、政治・経済・文化の各面で西洋世界に対して相対的に劣位に立たされた日本の知識人としての対抗的な戦略という面が内包されていただろう。この問題に関してはこれまでも既に繰り返し言及してきたものである。(注一〇) このような保田の戦略が持つ抑圧性や偏向性は言うまでもない。しかし、保田の一連の思考法が内包する問題性を根底的に批評するためには、やはり保田の思考と方法をその内在的な構造において十分に検討した上でなければならないと論者は考える。

本論で取り上げたようなジェンダーと〈文化〉的〈伝統〉の創出の関係という問題系は、言うまでもなく保田と彼が唱導した「日本浪曼派」の運動にのみ特徴的に見出されるわけではない。(注一一) それは今回論及した一九三〇年代から四〇年代という戦前から戦中にかけての日本のみならず、もっと古い近代以前から言説として存在し続けたものであり、近代以降も現在に至るまで多様な形式において生み出され続けてきた言説であるといってよい。さらにまた、そのような言説は日本に限定されず、幅広い時代と地域においてそのバリエーションが看取可能であるだろう。そして、あ

る意味ではそれらは現代的な課題として、形を変えながらも現在も私たちの前に存在し続けているように思われる。

注

（注一）保田の言説における〈女性〉に関わる先行論として、杉山康彦氏「近代の性愛――保田與重郎と島尾敏雄――」（一九九二・一一『日本文学』）、また井口時男氏「保田與重郎――イロニーと「女」」（一九九九・七『群像』）、野坂昭雄「保田與重郎と「女性」――「ヱルテル」論などにおける「近代」をめぐって」（二〇〇一・九『文芸研究』）などがある

（注二）『保田與重郎全集』（講談社　一九八五・一一―一九八九・九）第五巻　四一五頁。

（注三）『保田與重郎全集』第四巻　一一八―一一九頁。

（注四）同時代の女性像を日本の〈文化〉的〈伝統〉から批評するという保田の方法は、「女性と文化」（『婦人畫報』一九四〇・五）と題するエッセイや「感傷について」（『新女苑』一九四〇・七）といった同時代女性に関する批評においても共通している。

（注五）『保田與重郎全集』第四巻　二〇一頁。

（注六）『保田與重郎全集』第四巻　二一八―二一九頁。

（注七）評論集『ヱルテルは何故死んだか』（一九四〇・一〇　ぐろりあ・そさえて）は「ヱルテルは何故死んだか」（一九三八・三『文學界』）、「ヱルテル論断片」（一九三八・三『コギト』）「ギリシヤのヘテリスムス以後」（一九三八・七『日本浪曼派』）のテキストから構成される（『保田與重郎全集』第三巻に収録）。この評論集は、保田による西洋文学に関する唯一の単行本の評論集であるということもあって、従来の保田に関する研究史においても比較的考察の対象となることが多かったものである。

（注八）同時期の保田の言説においては、近代の結婚や家族制度に対する批判がその〈文学〉に関する認識と連関した評論が多い。例えば一九三八年四月号の雑誌『日本短歌』に掲載された「和歌は家庭と矛盾する」というテキストの中で、保田は、現代の和歌の問題に関して、和歌は本来的に相聞の形式を取るべきであり、それが〈生活の歌〉となると滅びると述べながら、〈和歌は家庭と矛盾する〉と結論付ける。後に評論集『詩人の生理』（一九四二・三　人文書院）に収録された「雑記帖（五）」に同じく収められた「結婚の矛盾」と題する断章においても、〈文芸は完全に家庭の反対である〉といった言及がある。同時代の言説との対比も含めて、ここには多くの興味深い論点が含まれている。

（注九）堀は保田「更級日記」に関して、堀自身の「更級日記」への関心が〈離れ出してゐた頃、保田與重郎君がこの日記への愛に就いて語つた熱意ある一文に接し〉〈再びこの日記は私の心から離れないやうになつてゐた〉（「更級日記」一九三六・五）と語っている。ただし堀における保田の影響の実態をめぐっては解釈が分かれることは周知の通りである。

（注一〇）評論集『和泉式部私抄』は、本論中で触れた通り、雑誌初出版と単行本所収版の間に改変がある。さらに戦後にも改版が存在し、内容的にも若干の異同が生じている（『和泉式部私抄』一九六九・一〇　日本ソノ書房）。
（注一一）『保田與重郎全集』第一四巻　一〇―一一頁。
（注一二）『保田與重郎全集』第一四巻　一二―一三頁。
（注一三）『保田與重郎全集』第一四巻　一〇六頁。
（注一四）和泉式部のような王朝期の女性の〈心情〉は、同時に日本の同時代女性の問題としても展開されていく。保田は「日本の女流文学」（『文藝』一九三九・四）と題する評論において〈日本の文化の心情の中にはずっと久しく王朝が流れていたのである。さうして王朝に作り上げられた延々とした女性的心情は、寧ろ今日新しい教養のない市井の女性のなかに生きているのである。さういふ現代を支えている心情を源まで遡ることはさして困難でない。日本の女性は恋愛に死し、日本の男子は国事に死すとは、非常の日に必ず思い起こされる信念である。〉と論じる。
（注一五）『保田與重郎全集』第一四巻　一三〇頁。
（注一六）『保田與重郎全集』第八巻　二四頁。
（注一七）保田の母に関する言説は、戦時下の公定の〈母性〉思想とでも言うべき言説とは微妙な偏差を持つように思われる。また、一連の母をめぐる保田の論理は、同時期の小林秀雄の批評や高群逸枝の母系制研究とも興味深い対比を示すだろう。例えば、山下悦子は、保田と戦時中の高群逸枝の思考の共通性を見出している（山下悦子「『脱戦後』へ向けての試み」『保田與重郎全集』第三十七巻「月報」）。
（注一八）『保田與重郎全集』第四巻　三二―三四頁。
（注一九）保田は「野村望東尼」（『婦人朝日』一九四二・三）と題するエッセイ中で、〈望東尼を望東尼たらしめたものは、さういふ花やかな舞台でなく、もつと尊い大切なもの、つまり民族の血の中のものであつただらう。〉として、〈野村望東尼〉に〈民族の血〉を見る。また、「倭姫命」（『婦人畫報』一九四二・六）においても、〈女性の機能としての母〉のみを考えて〈母というもののあはれさ〉を語らなかった〈近代文学〉を批判しながら、一方で〈倭姫命の御事蹟〉の中に、〈典型的な日本の女性の文化の伝統〉〈民族の母〉〈最も神聖な母の象徴〉を見出している。
（注二〇）拙論「日本浪曼派の言説戦略――保田與重郎と〈文学史〉の論理」（『国語と国文学』一九九九・一二）「日本浪曼派の言説運動――方法としての〈血統〉」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇二・五）ほか。
（注二一）上野千鶴子氏は、日本文化におけるジェンダーの位置を考察するにあたり、この「逆オリエンタリズム」（reversed orientalism）という興味深い概念を提出している。エドワード・サイードは、近代のヨーロッパが、オリエントに対して繰り返し〈女性性〉を結び付けたことを指摘しているが、上野はこのサイードの分析を援用しながら、このような政治的・文化的に優位に立つ側に対して、一方の劣位に立つ側の男性知識人が自己定義する方法は、大別して二通りあったと述べる（エドワード・W・サイード『オリ

エンタリズム』板垣雄三監修・今沢紀子訳　一九九三　平凡社）。一つは、帝国主義者側の〈男性性〉に対して、〈もうひとつの普遍〉＝〈男性性〉を目指そうとすることである。そしてもう一つは、〈男性性〉を自称する帝国主義者（ヨーロッパ）側に押しつけられた〈女性性〉を積極的に受け入れ、それを逆手にとって自己形成を目指すことである。上野はこの後者の思考法を、「逆オリエンタリズム」（reversed orientalism）と命名している（上野千鶴子「オリエンタリズムとジェンダー」加納実紀代編『ニュー・フェミニズム・レヴュー』六　一九九五　学陽書房）。上野は、日本の文化的領域の言説においては、歴史的にこの後者の戦略が選択されたとし、例えば〈からごころ〉に対する〈やまとごころ〉のような表象が形成された機序に関して分析している。この上野の概念は、保田の言説をめぐる分析においても示唆的であるように思われる。

〔付記〕本論文中の保田與重郎に関わる諸テキストの引用は、本文ならびに注において指示があるものを除いて、講談社刊行の『保田與重郎全集』（一九八五・一一――一九八九・九）に依拠した。引用文中の旧字体の漢字は原則として現行の字体に改め、引用文中の仮名遣いならびに句読点は原文のままとした。引用文・引用語は、〈　〉記号を使用して示した。